

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月1日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22320036

研究課題名（和文） ブレヒト、ヴァイゲルとベルリーナー・アンサンブル 1949-1971

研究課題名（英文） Brecht, Weigel and the Berliner Ensemble 1949-1971

研究代表者

市川 明（ICHIKAWA AKIRA）

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：00151465

研究成果の概要（和文）：集団創作で作られた作品は、何人かの原作者を有するだけでなく、独立したさまざまな芸術（文学作品、音楽とその演奏、俳優術、舞台美術、振付、装飾・衣装など）の集合体でもあり、集団でのみ成立可能なものである。すべての作品のアスペクトを考慮し、認識した新しい学問研究が求められる。ブレヒトは組織者、プランナー、演出家、演劇実践家として、集団創作の中心にいた。すなわち上演前にすべての台本がチェックされ、必要に応じて書き換えられなければならない。こうした集団創作の場で、著作者としてのブレヒトは後方に退き、上演台本の多くを若い共同創作者に委ねるようになった。ブレヒト死後のベルリーナー・アンサンブルは多くの困難を抱えることになった。東ドイツ政府はブレヒトの相続権を認めず、著作権を奪おうとした。ヴァイゲルはこれに強硬に反対し、対抗手段としてBBA（ブレヒト文書館）を設立し、検閲によって改変されることのない、信頼できるテキストの版を保持するため、出版権・上演権を西ドイツ（当時）のズーアカンフ出版社に委ねた。

研究成果の概要（英文）：Collective works, which do not only have several initiators, but also bring together different independent arts (literature, music and its performance, dramatic art, stage design, choreography, décor and costumes etc.) and is only collectively realizable, require a new science, which takes into account and recognizes all aspects of works. Brecht stands in the center of the collective work as organizer, planner, director and practical person of theatre. I. e. before performing, each script must be newly checked and - if necessary - rewritten. there, Brecht stands back as author (initiator) and leaves a good part of the scriptworks to the young collaborators. Difficulties after the death of Brecht: The GDR claimed to quash Brecht's inheritance and to abolish the copyright, what Weigel prevented obstinately; instead she built up the BBA (Bertolt Brecht archive) and took care of a reliable, uncensored edition of the works by the Suhrkamp publisher.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
2011年度	2,800,000	840,000	3,640,000
2012年度	3,100,000	930,000	4,030,000
年度			
年度			
総計	9,500,000	2,850,000	12,350,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学 / 芸術学・芸術史・芸術一般
キーワード：芸術諸学、ドイツ現代演劇、独文学

1. 研究開始当初の背景

市川明は基盤研究（B）「ブレヒトと音楽—演劇学と音楽学の視点からの総合的研究」の中で、若きブレヒトがシンガーソングライターであったことを取り上げ、「詩人、作曲家、歌手、演奏者、俳優、演出家という役割をまとめて担うシンガーソングライターとしてのパフォーマンスがブレヒトの演劇創造のモデルになっている」と結論付けた。ライブアートとしての舞台パフォーマンスに演劇の真髄を見ていたブレヒトは、演出家としていちばん輝いていたはずであり、その業績を検証する必要がある。またヴァイゲルの劇団総監督としての近代的なアートマネジメントについても考察を加えなければならない。作家が劇団を持ち、自作を演出するというケースは現代においても珍しくないが、ブレヒト、ヴァイゲルが東ドイツ政府との確執を乗り越え、ベルリーナー・アンサンブルを定着、発展させたことは重要である。この時期の彼らの「劇場の仕事」の中に、ブレヒト演劇の本質を探る鍵があると考えた。

2. 研究の目的

亡命から帰還したブレヒトが望んだのは自分の作品を上演する劇団・劇場を持つことだった。1949年に創設され、54年より現在のシフバウアーダム劇場を本拠地とするベルリーナー・アンサンブルは世界でもっとも有名な劇団の一つである。ブレヒトの妻で、女優のヘレーネ・ヴァイゲル（1900-1971）が、創設来22シーズンにわたって総監督を務め、ベルトルト・ブレヒト（1898-1956）は演出家として自作の有効性を舞台で検証し続けた。ベルリーナー・アンサンブルはヨーロッパ演劇のモダニズムの発信地として注目を集め、1954年のパリ公演などで高い評価を受け、世界中の演劇人、演劇愛好家の「巡礼」の地となった。本研究は、1949年（劇団の創設）から1971年（ヴァイゲルの死）までのベルリーナー・アンサンブルの活動を多様な角度から検討し、ブレヒト演劇の本質に迫る試みである。

3. 研究の方法

（1）ブレヒトの俳優術・観劇術

ナチス時代のゲーリング劇場の残滓や、俳優術・観劇術の頹廃に対し、ワイマール共和国時代の演劇水準を取り戻すことがブレヒトの狙いだった。異化に基づくブレヒト演劇が、ナチスの陶酔的な「政治の演劇化」に対抗するものとして生まれたことを論証する。

（2）演出家ブレヒトの集団的な創作方法

ブレヒトは1948年のスイスでの『アンティ

ーゴネ』上演以来、上演の設計図とも言うべき『モデルブック』を残し、他劇場での上演もそれに従うことを義務付けた。劇作家よりも演出家であることを優先させたブレヒト独自の集団的な創作方法を、『モデルブック』、ベルリーナー・アンサンブルの上演記録『劇場の仕事』、台本の異稿などから探る。

（3）ベルリーナー・アンサンブルの組織形態と戦略

劇団総監督としてヴァイゲルは、自国東ドイツで冷遇されていたベルリーナー・アンサンブルをまず海外で注目させ、メディアに乗せるという戦略を取った。1954年のパリ公演など、ヴァイゲルの残されたメモや東ドイツ政府の書簡から、その戦略の確信に迫る。

（4）検閲と形式主義批判に抗して
東ドイツ政権党がとる社会主義リアリズム路線とブレヒトの叙事詩的演劇は折り合わず、批判的な劇評が書かれ、作品の書き直しや上演中止も起きた。ブレヒトのリアリズム論は形式主義論争の矛先をかわすための妥協の産物であり、それとブレヒトをベケットやアヌイなどの不条理劇の東ドイツへの侵入の防波堤にしようとする党の思惑が合致してベルリーナー・アンサンブルを救ったことを新たな資料から明らかにする。

（5）ブレヒト死後のベルリーナー・アンサンブル

ブレヒト死後、相続人（ブレヒトの遺族）から著作権を取り上げようとする東ドイツ政府に抵抗し、ヴァイゲルは1956年にブレヒト文書館を設立、信頼できるテキストを保持し、検閲などによる改変を避けるため西ドイツ（当時）のゾーアカンプ出版社にすべての権利を譲渡した。困難な時期を切り抜けたヴァイゲルの知られざる功績を探る。

4. 研究成果

（1）2010年度

2010年度の大きなテーマは「アジアの/とブレヒト」であり、ブレヒトと日本演劇の関係を集中して探った。市川と海外研究協力者のルケージーは、ハワイで開かれた国際ブレヒト学会のシンポジウムで、「ブレヒトと維新派」のテーマで報告。市川は1920年代のアヴァンギャルド演劇と維新派の関係を探り、『キートン』においてブレヒトの教育劇とは違う、新しい形の教育劇が生み出されていると指摘した。秋葉は、日本におけるブレヒト受容、特にブレヒトと井上ひさしの共通点を政治意識や批評性、娯楽性の点から探った。市川は、2011年2月にアウクスブルクで行われた国際シンポジウム「異化。音楽におけるブレヒト現象」で、演出家としてのブレヒト

が、俳優術や観劇術の点で日本の歌舞伎から大きな影響を受けたことを、『男は男だ』などの上演・演出を例に指摘した。能の名乗りなどの手法や、日本の伝統演劇の音楽劇としての特性が、ブレヒト演劇に与えた影響の大きさも指摘した。

市川の二つの学会報告はアメリカとドイツの出版社からそれぞれ出版された。

(2) 2011 年度

2011 年度の主要な研究課題はアメリカにおけるブレヒトで、アメリカ亡命中のブレヒトの仕事を探った。5月に市川と海外研究協力者のルケージーがロサンゼルスに出かけた。南カリフォルニア大学の図書館や、研究者、文化人との交流から、ブレヒトのハリウッドでの活動について調査した。市川はフリッツ・ラング監督の映画『死刑執行人もまた死す』のシナリオがブレヒトによって書かれたものであることを立証し、12月の阪神ドイツ文学会のシンポジウムで発表、文学研究科の紀要に論文を掲載した。俳優ロートンとの『ガリレイの生涯』(『ガリレオ』)での共同作業についても重要課題として2年計画で探った。

4月にソウル国立大学校で開かれた国際シンポジウム「ブレヒトとミュラー」に市川と海外研究協力者のクノッパが招かれ、クノッパがブレヒトの俳優術について、市川がハイナー・ミュラーについてブレヒトの劇作術と比較しながら論じた。市川は『母』と能の関係についても探り、ベルリンでの新聞記事などの資料収集により、ブレヒトが得た歌舞伎、能からの影響が、彼の叙事詩的演劇の確立に大きな役割を果たしたことを論証した。

秋葉は引き続き、日本におけるブレヒト劇の上演を研究するとともに、「過去の克服」のテーマで千田是也や井上ひさしとブレヒトの関係を探った。

ブレヒト・ヴァイゲルを知る演劇人として、舞台美術家のカール・ハインツ・ドレッシャーのインタビューを行なった。

(3) 2012 年度

2012年度の主要な課題は、ブレヒトと俳優がどのように共同作業を進めて、ワークインプログレスの形で上演台本を作ったのかを探ることだった。市川は8月の日本ゲーテ協会の講演で『原ファウスト』上演(1952年)を取り上げ、若手のエゴン・モンクに演出を任せ、自らはドラマトゥルクとしてどのように上演に関わったのかを詳細に論じた。東ドイツ政府の文化政策とベルリーナー・アンサンブルの上演は合わず、しばしば鋭い批判に晒されたが、劇作法などにおけるブレヒトのモダニズムについても探った。10月に韓国で行われた国際シンポジウム「ブレヒトとベンヤミン」に招待され、講演をした。「ブレヒトとハリウッド」というタイトルで、アメリカ

時代の映画のシナリオ制作や、演劇上演の試みについて論じた。ブレヒトと俳優チャールズ・ロートンとの共同作業は非常に重要であり、『ガリレイの生涯』の成立過程を詳細に追った。その成果は3月の国際シンポジウムで報告された。

3月にはまず沖縄で「戦争と文学—ドイツ、日本、沖縄の眼差し」というタイトルで国際シンポジウムを開催、ルケージー、秋葉らが参加し、市川はデンマーク亡命中のブレヒトの詩について論じた。秋葉も「ブレヒトの戦略」というテーマで反ファシズム詩について報告した。続いて大阪で国際シンポジウム「ドイツ、韓国、日本におけるブレヒト」を開催した。韓国からイ・ウオンヤン、ドイツからルケージーが参加し、報告した。市川は「ブレヒトと広島、長崎」のテーマで『ガリレイの生涯』について論じた。7月にスウェーデン、フィンランドに調査に行き、亡命中のブレヒトの活動について資料収集を行なった。

この3年間、市川、秋葉、クノッパ、ルケージーの4人は世界各地に招待され、講演、報告を行ってきたが、それらをまとめた“Brechts Theater global”というタイトルの欧文の本(本文283ページ)を夏に出版する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計11件)

- ① 市川明 ギュンター・グラスの『はてしなき荒野』について—ドイツ統一小説の特徴、Arts and Media、査読無、3巻(2013)、6-25
- ② 秋葉裕一 早稲田大学の演劇博物館—ある理工系学会での特別講演から、人文社会科学研究所、査読無、53巻(2013)、87-104
- ③ 市川明 ブレヒトとフリッツ・ラングの”Hangmen Also Die”、大阪大学文学研究科紀要、査読無、52巻(2012)、91-132
- ④ 市川明 ハイナー・ミュラーにおけるドイツとドイツ史、Arts and Media、査読無、2巻(2012)、4-27
- ⑤ Akira Ichikawa Jan-Jan-Oper und Osaka Rap: Yukichi Matsumotos “Mizumachi” und “Keaton”, The Brecht Yearbook (The International Brecht Society), 査読有、36巻(2011)、84-93
- ⑥ Hirokazu Akiba Vergangenheitsbewaeltigung in Japan und Deutschland - Am Beispiel von Brecht, Koreya Senda und Hisashi Inoue -,

Theatre and Film Studies, 査読無、5
巻 (2012)、159-174

- ⑦ 市川明 ブレヒトと日本/中国—叙事詩
的演劇への道、Arts and Media、査読無、
1巻 (2011)、8-27
- ⑧ 秋葉裕一 Brecht-Rezeption in Japan:
„Meister Yabuhara “ von Hisashi Inoue,
演劇映像学 2010、査読無、5巻 (2011)、
99-117

〔学会発表〕 (計 14 件)

- ① 市川明 ブレヒトと広島・長崎—『ガリ
レイの生涯』をめぐって、国際シンポジ
ウム「ドイツ、韓国、日本におけるブレ
ヒト」、2013年3月16日、大阪府立江之
子島文化芸術創造センター
- ② 市川明 暗い時代からの叫び—デンマー
ク亡命中のブレヒトの詩、国際シンポジ
ウム「戦争と文学—ドイツ、日本、沖縄
の眼差し」、2013年3月13日、沖縄県立
博物館・美術館
- ③ 秋葉裕一 ブレヒトの戦略—日常性への
介入、国際シンポジウム「戦争と文学—
ドイツ、日本、沖縄の眼差し」、2013年3
月13日、沖縄県立博物館・美術館
- ④ Akira Ichikawa Brecht und Hollywood –
Ueber den Film „Hangmen Also Die“,
Internationales Symposium „Die
Ansaetze Brecht und Benjamin zum
Paradigmawechsel und ihre Aktualitaet,
2012年10月27日、ソウル、中央大学校
- ⑤ 市川明 ブレヒトの『原ファウスト』演
出、日本ゲーテ協会「ゲーテ生誕のタベ」、
2012年8月28日、大阪倶楽部
- ⑥ 市川明 ブレヒトとフリッツ・ラング
の” Hangmen Also Die”, 阪神ドイツ文学
会シンポジウム「ドイツ文学と映画」、
2011年12月11日、甲南大学
- ⑦ Akira Ichikawa Deutschland und die
deutsche Geschichte bei Heiner Mueller,
Koreanische Brecht-Gesellschaft:
Symposium „Brecht ± Mueller“, 2011年
4月15日、ソウル、国立大学校
- ⑧ 秋葉裕一 日本におけるブレヒト劇の翻
訳と上演—第二次世界大戦前から 1960
年代まで、早稲田大学演劇博物館グロー
バルCOEプログラム、2012年1月28
日、早稲田大学国際会議場井深大記念ホ
ール
- ⑨ Akira Ichikawa Brecht und
Japan/China – Ueber die Songs vom
„Guten Menschen von Sezuan“,
Internationales Symposium
„Verfremdungen. Ein Phaenomen Bertolt
Brechts in der Musik“, 2011年2月5
日、アウクスブルク、アウグスターナホ
ール

⑩ Akira Ichikawa the Opium of
Metamorphosis – Three Comical Sources
in Brecht and in Japanese Theatre,
Lecture “Brecht and Asia”, 2010年
12月16日、17日、スリランカ、コロ
ンボ造形芸術大学、ペラデーニヤ大学

⑪ Akira Ichikawa Jan-Jan-Oper und
Osaka Rap: Brecht-Nachklaenge im
Theater Ishinha – Als Beispiele:
„Mizumachi “ und „Keaton “ -, 13th IBS
Symposium: „Brecht in/and
Asia “ (International Brecht Society),
2010年5月21日、ハワイ大学

〔図書〕 (計 2 件)

- ① Akira Ichikawa Rombach Verlag (2013),
Verfremdungen. Ein Phaenomen Bertolt
Brechts in der Musik, 454 (243-262)
- ② 秋葉裕一 井上ひさしの演劇、翰林書房
(2012)、380 (64-93)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

市川 明 (ICHIKAWA AKIRA)
大阪大学・文学研究科・教授
研究者番号：00151465

(2) 研究分担者

秋葉 裕一 (AKIBA HIROKAZU)
早稲田大学・理工学術院・教授
研究者番号：10063801

(3) 海外研究協力者

ヤン・クノッフ (JAN KNOPF)
カールスルーエ大学教授

ヨアヒム・ルケージー (JOACHIM LUCCHESI)
カールスルーエ大学ブレヒト研究所研究
員